

## 唯物論打破の宗教哲学・序説

伊藤 淳

### 序

本稿の目的は、閉塞状況に陥った現代文明を特徴づける迷妄の一つと思われる唯物論的世界観（無神論や不可知論を含む）を打破し、人間の魂の自由と健全な発展を保証する霊的世界観（広義の宗教的価値観）を打ち立てることである。

唯物論とは、簡単に言うと、「物質以外の存在形式」を認めない思想傾向である。厳密に言えば、「唯物（物質しかない）」という状況はあるにしても、唯物・論という理論は、成り立たないはずである。物質しかないのであれば、理論という非物質的、理念的存在形式は、基本ありえないだろうが、一切の精神的働きも全否定するようなラディカルな唯物論は、さすがに現代においても想定しがたい。

実際には、理論や理念、思考というものの存在要件として、物質的な条件のみを考えるとというのが、現実的に有効な唯物論であろう。現代の唯物論者であっても、精神や精神の働きとしての思考そのものの存在を否定する人はそうそういないだろう。もしも、思考がないのであれば、唯物論の論文を書くことさえできないはずである。

論文も書く行為も思考を前提にしたものであるから、当然、そういう意味での思考や思考の場である精神を否定することはできないのである。（これはある意味でデカルト的コギトにも通じるであろう。）

唯物論は、精神そのものを否定することにその主眼があるのではなく、我々が通常、「心」、「精神」と呼んでいる思考の場が、実は、純物質的な条件にのみ還元できるという考え方を取るのである<sup>1</sup>。

現代においては、このような意味においてとらえられた唯物論は、人間精神の作用をすべて物質的な条件＝脳的作用に還元しようとする唯脳論の立場に行きつくのは当然であろう<sup>2</sup>。唯脳論的な立場に立つ唯物論者でも、精神作用その

---

<sup>1</sup> 逆に言えば、私たちの精神作用を非・物質的なものに由来すると考えるのが、精神主義（スピリチュアリズム）である。そして、一切の物質的存在をも精神の顕れととらえるのが、唯心論である。

<sup>2</sup> 「唯脳論」という語の提唱者である養老孟司は、「ヒトの活動を、脳と呼ばれる器官の法則性という観点から、全般的に眺めようとする立場を、唯脳論と呼ぼう」と言っている（養老孟司『唯脳論』、筑摩書房、1998年、p.12）。この定義だけだと、まだいわゆる精神の活動全般を脳の法則性に還元するまでいかず、脳から独立した精神性を許容しようにも思える。しかし、養老は、同書のなかで、「心はじつは脳的作用であり、つまり脳の機能を

ものを否定はせず、大脳というハードに対するソフトとして捉えるのである。

当然、肉体の死滅とともにハードである脳が機能停止をすれば、ソフトである精神の作用も完全に終始する。したがって、死後の生などは決してありえないことになるのである。

また、現代的な唯物論の展開相としては、リチャード・ドーキンスらによって唱道される遺伝子還元論もあるだろう。進化論的知見に裏打ちされた遺伝子論によって、神による生命の創造という神話が崩壊し、まさに唯物論的な生命論が横行するようになったのである。

このように現代においては、科学の名を借りた唯物論的思想が世の中を席捲し、神による人類創造という古来からの宗教的世界観が、前時代の遺物とされ、あたかも無知蒙昧の未開民族による迷妄であるがごとく、学問的なフィールドからのみならず、公教育や全国紙、国政レベルの演説などの現代の公的領域からも追いやられることになったのである。

それは、カント以降の霊的なものを哲学や学問の研究対象外とする不可知論の流れとも軌を一にしているだろう。以下、こうした現代的唯物論の系譜を批判的に検討するために、まずは古代唯物論の発生原因をさぐり、また近代科学に由来するところの近現代の唯物論の帰趨を把握しつつ、最終的には、真実の科学精神や啓蒙的理性の立場に立ってみても、唯物論的思想の方がはるかに非科学的、反理性的であり、倒錯した狂信的ドグマにすぎないことを検証していきたい。

その結果、普遍的な宗教精神、宗教哲学は、高度な知性理性や科学精神と矛盾するどころか、自然科学のみならず精神諸科学の知見とも連動して、夢のある豊かで、生産的な未来社会を開くための一助になることを願うものである。

## 1 古代の唯物論の起原とその問題点

現代文明の淵源には、古代ギリシャの哲学思想がある。したがって、現代的唯物論の起原もたどっていくと古代ギリシャの唯物論的自然学にまでさかのぼれる。この古代唯物論の発想は、そのまま現代の集合的潜在意識を形成するひな形（アーキタイプ）を形成していると思われるので、その本質と問題点を批判的に検討することで、現代人の心の病ともいえる唯物論の基本パターンの診断書ができ、したがってその処方箋（ワクチン）も開発することができる。（もちろん、唯物論は、人間思想の産物なので、それを除去するためのワクチンも当然物質的なものではなく、唯物論解除の思考プログラミングを開発すればよいのである。

古代ギリシャの唯物論の代表的論客は、デモクリトスとエピクレスである。

---

指している。」(p.28) と断定し、「精神＝脳の機能」という前提で全立論を展開している。

以下に、時代背景も踏まえつつ、この両者の思想を吟味してみよう。

### 1.1 デモクリトスの唯物論

一般に西洋哲学は、古代ギリシャ BC600 年頃に始まったとされる。世界の意味や起原を神話によって説明するのではなく、万物の根源（アルケー）というより普遍的な起原に求めることで、初めて哲学的思考が生まれたのである。

例えば、アリストテレスによって最初の哲学者とされたタレスは、万物の根源（アルケー＝原始）を水とした。これは、一見すると古代唯物論の走りとも言えそうであるが、実際は、この「水」は、現代科学でいう H<sub>2</sub>O といった純物質ではなく、理念モデルで考えられた精神的物質（水の精とでもいべきイマジナルな存在）なので、厳密には唯物論ではない。同様に、アナクシマンドロスは、アルケーを「無規定なるもの」とし、アナクシメネスは、「空気」としたが、同じ発想である。この三人を彼らが活躍した土地にちなんでイオニア学派と呼ぶ。彼らは、原初的な物質に「生命的なもの・精神的なもの」を見出したのである。これを物質そのものに生命を見るという意味で物活論と呼ぶ。

その他にも、アルケーを「存在」そのものとするパルメニデイスや「変化(火)」とするヘラクレイトス、数とするピュタゴラス学派などの“諸子百家”が輩出したが、やがて世界を原初的で単一の根源的物質や原理で説明する一元論ではなく、世界の説明原理がより精緻に複雑化してきて、多元論の立場が生じてくる。この多元論の土壌の中から古代唯物論が発生した<sup>3</sup>。

そうした多元論者の一人が、アナクサゴラスであるが、彼は、万物は無数の種子（スペルマータ）でできていると主張した。ちょうどバラにはバラの種が

---

<sup>3</sup> 西洋哲学の歴史は、古代ギリシャ哲学史の泰斗コンフォードが正しく指摘する通り、広義の宗教精神から始まっている。また、周知のとおり、西洋哲学に圧倒的な影響を与えたピュタゴラス及びその教団は、現代的な学問分野の範疇でとらえるならば、哲学者であると同時に数学者、音楽家、また宗教家、さらには政治指導者であった。ピュタゴラス教団は、輪廻転生を旨とする宗教団体・秘密結社であり、現代的な意味での個別学問分野としての哲学は、この時代にはまだ成立していなかったと言える。ギリシャの原初においては、哲学は、すぐれて宗教哲学であった。宗教哲学と唯物論の哲学は、決して両立しえない関係にある以上、今古代唯物論の起源を探求するときに、そうした宗教哲学的な土壌から何ゆえに異質の「唯物論」が発生したのかという疑念が生じてこざるをえない。古代ギリシャにおいて、唯物論の哲学が生まれたのは、原子論からである。これは、古代ギリシャ思想に特有の現象である。例えば、古代インドにおいても精緻な原子論を説くヴァイシェーシカ学派の哲学もあったが、これは、インドの学問にほぼ共通する「輪廻からの解脱」という高度に宗教的色彩を帯びた理論であった。（川崎信定、『インドの思想』、筑摩書房、2019年、p. 162-p. 167）

あり、堇には堇の種があるように、水や空気、石や火などの天地万物の諸存在には、それぞれの種があるという考え方である。

しかし、アナクサゴラスの多元論からは、ストレートに唯物論は発生しない。なぜならば、彼の考える無数の種子は、無限小であると同時に色・味等によって、相互に皆区別される、つまり質的な多様性を許容しているからである。

質的、性質的な差異を認めると、何らかの精神的・神的な特性をも受け入れることになる。例えば、色彩であっても、赤、青、緑といった質的な色は、人間の情感が連動してくるが、単純に光学的なスペクトルの波長ということであれば、そうした精神的な情調は、一切捨象されることになり、無機量的な数値のみが問題となる。

したがって、近現代の科学的な観点でいえば、それは、タレスの「水」同様に純然たる物質とは言えないのである。

さらに、アナクサゴラスは、こうした種子を混合させたり分離させたりする動力を考え、それを精神（ヌース）とした。そういう意味でも、彼の立場は純然たる唯物論では決してありえない<sup>4</sup>。

それに対して、もう一人の多元論者デモクリトスの登場をもって初めて、古代唯物論の地平が成立するのである<sup>5</sup>。デモクリトスも、アナクサゴラスと同様に無数の原質を考えたが、それをもはや性質的な差別を有するものとはみなさず、単純に量的な差別によって互いに区別されるものと考えた。すなわち、それらの原質は、その形態や配列、位置関係によってのみ互いに区別されるにすぎない<sup>6</sup>。その原質を彼は、「分割できないもの」＝原子（アトム）と名づけた。

---

4 確かに、プラトン『パイドン』によると、ソクラテスは、若い時にアナクサゴラスの理性の教説に触れて、狂喜し、世界を精神原理から説明する道を見出されると信じて、その著作を研究したが、その結果は、逆に深い失望に陥ることになった。結局、太陽や星を単なる物質原理で説明するにすぎないとわかったからである。これは、ソクラテス流の観念論から言えば、物質原理にとらわれているということになるだろうが、だからといってアナクサゴラスを唯物論者だと同定することはできない。太陽に物質的側面があるとしても、同時にそこに精神的な属性を重ねてみているからである。このようにアナクサゴラスは、観念論から唯物論へと移行する際に現れた、精神原理と物質原理との間の折衷主義の立場を取っていたということもできるだろう（プラトン『パイドン—魂の不死について』、岩田靖夫訳、岩波書店、1998年、97B8-99D3）

5 より厳密に言えば、デモクリトスの師レウキッポスが、原子論の創始者と言われているが、レウキッポスに関しては、不明な点が多く、また事実上、古代原子論は、デモクリトスによって受け継がれ、大いに発展されることになるので、ここでは、原子論を代表するデモクリトスのみを扱う。

6 「レウキッポスとその仲間のデモクリトスとは、充実体と空虚がすべての構成要素であると主張し、前者をあるもの（存在）だと言い、後者をあらぬもの（非存在）だと言った。一略一ところで、かれらの説によると、その差別に形態と配列と位置との三つがある。」（アリストテレス『形而上学』第一巻第四章 b 10）

これが厳密な意味での原子論の誕生となる。

したがって、そこにいかなる質的、精神的な意味合いを盛り込むことはもはや一切できなくなり、自然の構成要素において非精神的特徴、つまり純物質的な原理のみを認めるようになるのである。

それは、ちょうどが、大宇宙と小宇宙が照応する質的自然観を有していたルネッサンスの自然哲学に対して、17世紀のガリレオらによって、自然を量的に計量可能なものと見なしたことで、近代科学が成立したプロセスとも対応している<sup>7</sup>。

しかし、それだけでは、まだ唯物論を構成する一要件を満たすにすぎない。例えば、近代哲学の創始者といわれるデカルトも、精神（思考）の領域と物質（延長）の領域を峻別し、前者を不可死の霊的実体とし、後者を近代科学の研究対象として機械論的に考察したが、精神の霊的独立性を認めている以上、唯物論にはなりえない。

精神の領域をも上記の物質原理、すなわち原子論的に説明することで、初めて古代唯物論の条件が出揃うのである。実際に、デモクリトスは、自然観を原子論的に考察するのみならず、それを一歩進めて、感覚その他の喜怒哀楽、価値観など精神的現象一切も原子の運動から機械的に説明しようとした。「甘さという感覚という感覚があり、苦しさという感覚がある。そして、色彩をめぐる感覚がある。しかし実際には、原子と空間だけが存在するのである<sup>8</sup>。」

要するに、人間的な情感などの質的なものもすべて量的原子論的に還元するのである。いわば「唯・原子論」をもって、古代唯物論は一応の完成を見るのである。

以上、唯物論の発祥という観点に絞って、古代ギリシャにおけるいわゆる「ソクラテス以前」の自然哲学の展開を追ってきたが、その最終ランナーであるデモクリトスは、ソクラテス、プラトン、アリストテレスらアテナイ期の哲学を最高峰とする正統的なギリシャ哲学史観からすれば、反・観念論、反哲学的な異端児として矮小化されがちである。

しかし、近代科学の発展史の文脈においたときには、デモクリトスは、一転、現代原子論を2400年先取りした希代の英雄、偉大なる先駆者という位置づけになる。

ループ量子重力理論を提唱する最先端の理論物理学者であるカルロ・ロヴェッリによると、デモクラテスは、2005年にブラウン運動を精緻に観察し、現代

---

<sup>7</sup> 例えば、「ガリレオが、形と大きさと量と運動とが、ある物体について研究する場合に科学者が調べるべき第一の性質であると言ったのは、まことに当を得ている。一略一還元すれば、科学は、測定と計算のできる事がただに注意を向けるということである。」(H・バターフィールド、『近代科学の誕生(上)』、渡辺正雄訳、講談社、1978年、p.143)

<sup>8</sup> セクストス・エンペイコリス『学者たちへの論駁(1-3)』、金山与平、金山万里子訳、京都大学学術出版会、2005-2006年)

原子論の原型を創ったアインシュタイン博士とほぼ同レベルの思考実験をなすことで、古代版の原子論にたどり着いたという<sup>9</sup>。

アインシュタインも純粋に思弁的にブラウン運動を省察して、物質のこれ以上分割できない最小単位を割り出したのだが、デモクリストスも、物質の分割性を論及しほぼ同等の結論に行き着いた。

つまり、物質を無限に分割できるとしたら、最小単位がゼロになり、ゼロを総和してもゼロにしかならず、物質を合成する最小単位にはなりえない。したがって、論理必然的に、幅はあるがこれ以上に分割できない物質の最小単位を想定せざるをえないということである。

これは、ロヴヴェッロによると、まさに現代科学の水準に達している考察である。例えば、水を常に分割していくと、無限に分割はできず、必ずこれ以上に分けられない水分子 ( $H_2O$ ) に行きつく、ということである。このような知見は、現代では、中学生でも常識的に理解できるだろう。

要するに、現代物理学を支える原子論の根底には、デモクリストス的世界像が息づいているとも言えるのである。現代の原子論は、世界内にあるすべての存在を量的な原子に還元する。言い換えれば、その原子の一つ一つが、それ自体としては、特定の性質を持たず、つまり無意味の記号が、形や位置、配列によって、意味を形成するということだ。

言いかえれば、漢字やエジプトのヒエログリフのような象形文字、表意文字ではなく、その一文字では何の意味も持たないアルファベットのような表音文字と同質だということである。ロヴヴェッロは、そのあたりの消息を以下のように活写する。

原子と原子が結びつくときに、微視的なスケールでは何か起こっているのか。ここで重要なのは、原子の形、全体の構造における原子の配列、そして原子の結びつき方だけである。二十数個のアルファベットがさまざまに組み合わせたり、悲劇や喜劇、滑稽や壮大な叙事詩が作り出されるのと同じように、基本的な原子がさまざまに結びつくことで、限りない多様性を備えた世界が生まれる。この比喻は、デモクリトス本人によるものである<sup>10</sup>。

これは、確かに驚くべき省察と言わざるを得ない。世界に現れた、どんな複雑な事象も、科学的の探究の果てにはもっとも単純な構成要素に還元されるという現代の最も典型的な世界像の原型が、細部の技術論は除き、その本質において十全に余すところなく古代原子論の中に胚胎していたということだ

<sup>9</sup> カルロ・ロヴヴェッリ『すごい物理学』、第1章、竹内薫監訳、栗原俊秀訳、河津書房出版、2017年

<sup>10</sup> 前掲書 p.21 同書の註4によれば、引用文中の「デモクリストス自身による」という文の出典は、キケロ『アカデミカ・プリオーナ』(II,23,73)

からである。

したがって、ロヴェッロは、現代科学の視座においてデモクリトスの功績を最大限に評価しつつ、それが観念論優位の西洋哲学史において意図的に矮小化され、また排斥されてきたことを惜しむのである。

プラトンとアリストテレスはデモクリトスについてよく知っており、彼の思想に異議申し立てた。デモクリトスとは相いれないこの二人の思想が、それから何世紀にもわたって知の発展を阻害しつづけることになる<sup>11</sup>。

ただ、ここで気を付けておくべきは、デモクリトスを現代の原子論的世界像の先駆者として称揚するのであれば、そうした原子論に立脚した唯物論の先駆的な責任者としても追及することができるということだ。

確かに、自然観察において、神話的想像や形而上学的な思弁を排除する姿勢は、自然を擬人化することのなく、自然そのものとして探究する近代科学の方法論を先取りしていたという評価は間違いないだろう。

しかし、同時に、世界内にある万象万物をもっとも単純な原子に還元し、逆にそれ自体意味のない原子の配列組み合わせから万物を再考する考え方には、やはり論理的飛躍があり、非科学的な妄念に過ぎないと思われるのである。

先に引用した箇所：「二十数個のアルファベットがさまざまに組み合わせたり、悲劇や喜劇、滑稽や壮大な叙事詩が作り出されるのと同じように、基本的な原子がさまざまに結びつくことで、限りない多様性を備えた世界が生まれる。」ということであるならば、その「アルファベット」を組み合わせる主体が何かということが問題となるからである。

この引用箇所に続いて、ロヴェッリは、次のように続ける。「この途方もない原子の舞踊には、いかなる目的も意図もない。わたしたちは、自然観に存在するほかの事物と同様に、終わりなき原子の舞踊の帰結である。それはまた、偶然による結びつきの結果とも言い換えられる。」

以上、二つの引用箇所を合一すると、「原子の配合組み合わせによって万物が組成されるということは、二十数個のアルファベットがいかなる目的もなく意図もなく、終わりなく乱舞することで、偶然に悲劇や喜劇、叙事詩が勝手に創りなされるようなものだ」という誠に奇妙奇天烈な結論になる。

言いかえると、アルファベットの文字を記した無数のカードを空中に投げたら、偶然に素晴らしいシェイクスピアの戯曲や詩篇ができるということだ。いたずらに神の手を借りずに、自然を説明したいという願望には一部理解できるところがあるが、これは誰の目にも不合理極まるナンセンスと映るだろう。

こうした珍妙な不合理を回避するためには、世界を表現する文字としての原

---

<sup>11</sup> 前掲書 p.22

子そのものにある種の「制作意図」という意味を付与するしかないだろう<sup>12</sup>。しかし、それであれば、無機的量的な区別しか持たない原子をいたずらに質化し、神秘化・擬人化することになって、デモクリトス哲学、そして現代科学が死守せんとする前提が根本から崩れることになる。

であるならば、原子という文字を配列する超越的意図を想定せざるをえないという結論以外にはありえないのではないか。その意図を、「神の見えざる手」あるいは、「インテリジェンス・デザイナー」、もしくは「サムシング・グレイト」と呼ぼうと、あるいは伝統的な「造物主」、「神仏」と呼ぼうと、それは二次的なことである。

肝心なことは、原子論的哲学を突き詰めていくと、それがどれほど外見上スマートに見えようと、自家撞着をして、非科学的な謬見に行きつかざるを得ないということである。

実際に、近代科学における原子論の事実上の創始者シャルル・ボイルは、「人間の精神以外の外的自然を非精神的な「延長」とのみとらえたデカルトと意見を異にし、神は運動を起こしその法則を打ち立てるために必要であるだけでなく、また、原子や粒子を組み合わせた生きた世界をつくり出すように組織するためにも必要だと考えていた<sup>13</sup>。」

また、ライブニッツも近代的な原子論を精緻に突き詰めることで、物質の究極の最終単位（モナド）において非物質的靈的原理を見出すに至った。

このように近代の原子論は、その淵源においては、むしろ靈的世界観を前提にしたものであり、その後の唯物論の流れは、その本来の原子論の本質を忘却、もしくは隠ぺいすることで、歪曲し形骸化する中で生じてきたものではないだろうか。

デモクリトスの古代原子論にまで遡って検証すれば、その劫初において、論理的な自家撞着（飛躍）がある以上、原子論的な唯物論は、真正の科学的立場を逸脱した、むしろ似非宗教的独断に過ぎないことが見てとれよう。

## 1.2 エピクロスの唯物論

---

<sup>12</sup> それは、言ってみれば、個々の原子そのものを神格化する「原子論的多神教」とでもいうべきものとなるが、そもそもデモクリトスの唯物論的原子論においては、質的なものを排除するので、こうした考え方とは、決して相いれない。

<sup>13</sup> H・バターフィールド、『近代科学の誕生（下）』、渡辺正雄訳、講談社、1978年、p.21、バターフィールドは、また同書の中で、古代原子論と近代原子論（粒子論）の質的な差を以下のように巧みに説明している。「古代原子論がすべてを原子の偶然の結びつきによるものとし、それゆえに宇宙はいわば偶然性にあやつられているという考え方をしていたのに対して、新しい粒子論哲学ではメカニズム自体に合理性があるとされていたのである。まことに、こうした粒子論は、合理性追求の産物であり、神を正当化しようとする意図に即して主張された説でさえあった。（p.14）」

デモクリトスの原子論が、人間の精神の働きをも原子論的に説明せんとすることで、唯物論の嚆矢となったことは上述のとおりだが、そうした「精神およびその所産を原子に還元する」思考には、まだ不徹底なものがあり、論理的にも飛躍があると思われる。

なぜならば、色・音・味といった人間の五感に対応する現象は、物質的な側面と同様に人間的感覚、理念的側面を否定しえないからである。赤いリボン、鈴の音、甘い果実といった形容は、有意味だが、色そのもの、音色そのもの、甘さそのものを人の感覚はとらえることができない。物質を介在してこそ人間的感覚も成り立つにせよ、そこに理念的価値的なものが残存する以上、原子論的還元をなしたとしても、人間精神そのもの非物質性は、全否定はできない。

さらには、人間精神と物質現象の決定的な違いは、後者は必然の法則に従うのに対して、前者は、自由意志によって、そうした必然法則から逸脱することができるということであるが、唯物論の立場に徹するとなると、「どのようにして、そうした必然の法則から、自由（意思）が生じたか」という問題が生じるからである。

エピクロスは、この問題に関して、万物は原子でできているとするデモクリトスの学説をさらに先鋭化して、「人間の精神も自由意志も、結局無数の原子が、ぶつかり合った偏差（方向の偏り<sup>14</sup>）から生じる」とした。要するに、「心は、物質の不規則的な運動からたまたま発生してしまった、そこで、自然必然性の支配を脱した、偏差として精神が生じた」という考え方<sup>15</sup>である。

これは、一見するととるに足らない微小な変更のようにも思えるのだが、そうではない。デモクリトスの原子論の立場からは、まだ、現代的な唯物論には直結しない。なぜならば、「万物は、原子でできている」といった立論をしたところで、精神と物質の間の不可思議な関係が説明し切れていないので、この両者の質的な相違まではなかなか否定しにくいからである。

つまり、カントの論法をとると、精神の特性は自由であり、物質の特性は、

---

<sup>14</sup> エピクロスは、諸原子は、垂直に落下運動していると考えたが、その際に原子自身がぶつかりあうなどして、その方向に偏りが生じたとしている。「この方向性の偏りという概念は、それが当然言及されていたと信じられる当該箇所が脱落しているため、エピクロスの残存テキスト中には見出されない。しかし、他の諸伝承（ルクレチウスを始め、オイノアンのディアゲネス、アエティオス、プルタルコス、キケロ、ガレノスなど）は、かれ自身にこの概念があったこと十分に証拠立てている。（『エピクロス 教説と手紙』、井隆、岩崎允胤訳、岩波書店、1959年、p.160, 註（17）」

<sup>15</sup> この偏りを自由意志の起源とする考え方に関しては、前掲書の解説で、次のように説明されている。「エピクロスは、デモクリトスの決定論では満足せず、自分の唯物論を首尾一貫させるために、自由意志の働きの基礎を原子の運動における偶然性の契機に求めることになる。一略一原子の運動における偶然性の契機とは、それ自身の重さを因とする落下にさいしておこなわれる方向の偏りにほかならない。つまり、エピクロスは、唯物論の立場を守りながら、自由意志の働きの、原子のこの方向の偏りによって解決しようと試みたのであり、その努力は貴重である。（p.202）」

自然法則に従うという意味での必然ということになる。現代人でも、「自然法則が律する物質現象からは、自由は生まれてこない」、「精神を単純に原子の戯れに還元することはできない」という実感はぬぐえないだろう。

しかし、エピクロスのように、「精神は、自然必然性の帰結ではなく、むしろそこからの微妙な偏差による逸脱なのだ」と説かれたら、どうだろうか。ある意味では、神による生命や精神の創造による説明よりも、現代的でスマートな理論のように受け取られるのではないだろうか。

実際に、エピクロスの論法を一切排して、生命の起源や人間精神の発生を説明しようとする、神話的な起源や神意による発生説をとらざるを得ない。世界各地にある創造神話のどれを一つとってもいい。

例えば、旧約聖書では、人類の創造は、「主なる神は土の塵をもって人を形づくり、その鼻に命の息を吹きられた<sup>16</sup>」という説明になる。さらに、最初の女性エヴァは、最初の人類（男）アダムの肋骨を取って創られたというのだ<sup>17</sup>。これらは、近代科学的思考法になじんだ我々の耳には、荒唐無稽なお伽噺、よく言ってなにかの象徴のようにしか感じられないだろう。

つまり、「科学が未発達時代に生きた古代人にとっては、生命や人類の誕生、精神の発生などは、まったく解明不可能な神秘現象としか思えないので、非科学的なオカルト的な神話による説明に頼らざるを得なかったが、現代科学の照明が当てられると、そうした未開のヴェールの霧が晴れて、いつか必ず真相が解明される」と考えるのが、現代的思考法である。

これが、エピクロスによるより先鋭化された原子論的唯物論である。驚くべきことに、現代の唯物論も基本的な思考の枠組みは、まったく同じである。現代世界において、唯物論的政治経済哲学を樹立し、米ソの冷戦によって世界を二分するほどの深甚なる影響を与えたカール・マルクスは、通常デモクリトスの亜流にすぎないとされるエピクロスによる（デモクリトス原子論からの）この微妙な変更を非常に高く評価し、学位論文『デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異』において次のように書いている。

デモクリトスとエピクロスでは、学問の確実性と学問の対象の真理性についての理論的な見解に、はっきりとした違いがある。そしてこの違いは、二人の哲学者の学問的なエネルギーと実践の違いとして現れている。デモクリトスは、原理は現象の世界には姿を現さないと考えている。原理は現実的なものではなく実在しないものである。反対に感覚的な知覚の世界は、実在する世界である。一略一だから、デモクリトスは経験的な観察へと赴く。哲学には満足できない

---

<sup>16</sup> 聖書・創世記 2・7

<sup>17</sup> 同 2・27

ので、実証的な世界に頼ろうとするのである<sup>18</sup>。

マルクスの理解では、先述したロヴェッリの指摘の通り、デモクリトスを実証的な科学者として位置付けているのがわかるだろう。それに対してエピクロスには、哲学者としてのより尊貴な位置づけがなされている。両者の評価の差は、歴然だ。

エピクロスには、これとはまさに反対の姿がみられる。エピクロスは哲学に満足し、哲学することで、幸福になる。「真の自由を手にするためには、哲学に仕えなければならない。哲学に仕えなければならない。哲学に身を捧げ、身をゆだねる者は、自由を待ち望む必要はない。ただちに解放されるからだ。哲学に仕えるということ、それが自由そのものだからである。」エピクロスはこう主張する<sup>19</sup>。

結局、マルクスが見るところ、デモクリトスとエピクロスの差異は、前者の場合には、実証科学的なレベルでの唯物論にとどまっているので、人間精神の不可思議の余地を残しているのに対して、後者においては唯物論の適応範囲が明確な自由の領域、つまり精神をも包摂しているということになる。

したがって、エピクロスは、単に物質主義的科学者にとどまらず、言葉の真の意味の唯物論・哲学者となるのである。この考え方をとると、当然に人生において霊的な目的などないことになるから、快樂説の倫理観を取らざるえないことになる。

現代思想は、まさにこのエピクロスの土壌から派生した。まず、上記のマルクスの共産主義や唯物論的弁証法にしてからが、その発想の根っこには、同質のものがある。

マルクスは、世界精神の導きを前提にしたヘーゲルの弁証法的発展史観を転倒させて、歴史の発展の根底に生産構造のみを見るという唯物論的発展史観を構築したが、これも歴史の生成に一切の精神的なるものの介在を拒絶するという点において、まさしくエピクロスの「自由論（実際は、自由否定論）」の発露、つまり一見精神の所産と思われるものも単なる原子、物質の戯れ（偏差）に還元するという発想に他ならない。

また、マルクスと同時期に、自然科学の世界を席卷し、キリスト教世界にも激震を与えたダーウィンの進化論にもこのエピクロスの唯物論と同質・同根の思想傾向を見て取ることができるだろう。

---

<sup>18</sup> 『マルクス・コレクション I デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異、ヘーゲル法哲学批判 序説、ユダヤ人問題によせて、経済学・哲学草稿』中山元、三島憲一、徳永恂、村岡普一訳、筑摩書房、2005、pp.33,34

<sup>19</sup> 前掲書 pp.35,36

ダーウィン進化論は、動植物の進化の根底に精神的な意図（神意）を一切認めず、すべて自然現象として偶然の働きを見た。進化のある時期において動物に視覚が生じたのも、キリンの首が長くなったのも決して合目的な意図などによるのではなく、「突然変異」の作用にすぎない。

偶然に変異し、進化した種が、自然淘汰のふるいを潜り抜けた結果、適者のみが生き残った（適者生存）という論法はよく知られている。この一見合目的と思える「進化」を偶然の所産と強弁する発想もエピクロスの唯物論の新展開にすぎず、また「突然変異」の概念こそ、まさに自然界の定常的方向性から逸脱するエピクロスのいわゆる「偏差」と酷似してはいないか。

したがって、進化の過程において、高度な知性や理性や道徳心をもった人間精神が誕生したのも、進化論者の手にかかれば、神的意図などでは一切なく、すべて自然界における変異にすぎないことなる。もちろん、「自然環境の激変によって類人猿が二足歩行をしたから、手が自由になったから、脳が劇的に進化した」、「しかもそれは一瞬の変異ではなく、数万単位の時間の推移の中で起こったことである」など、様々な装飾句によって論点がやや不鮮明に複雑化してはいるが、そうした装飾表現を一切除去して議論の本筋のみを浮き彫りにすれば、「人間精神は、自然法則からの逸脱によって偶然に生じた」というエピクロスの論旨をその根底に容易に見て取ることができよう。

さらに、生命進化のプロセスにおいて、人間精神の座という点にのみ議論をフォーカスすれば、精神の場としての脳を特権化する大脳優位論、ひいては一切の精神の所産、文化現象の総体を脳の所産とする唯脳論の土俵（トポス）が必然的に出現することになる。

「心は、結局脳という物質の働きにすぎない」、つまり、「心が、物質とは独立して存在するのではない」という唯脳論は、人間精神の本質が脳というコンピューターに他ならないという「人間機械論」の立場をとっているのである。恐るべきことに、こうした「唯脳論的唯物論」は、現代の学界の仮説ではなく、定説になっている。

したがって、「心が物質的からは全く独立した霊的な存在であり、肉体（物質）が滅んでも生き続ける」という靈魂不滅の考え方は、現代人の耳には、「科学の発展する前の未開人の御伽噺」のように聞こえるのである。

したがって、現代の科学者も哲学者も、ある意味で「エピクロスの弟子」と言えるだろう。つまり、心の存在も認めず、ましてや死後の生や輪廻転生など認めるはずもなく、人間は、よくできた機械（AI）であり、死ねば（破損すれば）、それっきりという考えである。こうした考え方からは、当然、「生きているうちに面白可笑しく生きるのが一番」という刹那主義・快樂主義に行きつくことは当然だろう。

実際のエピクロスは、いわゆるエピキュリアンという語感から連想されるような快樂三昧の生活を送ったのではなく、極力肉欲を慎み、精神的快樂を旨とし

て節度ある生き方をしたと伝えられているが、もしそうであれば、かえって彼の実際の人生態度は、(無自覚にせよ) その学説とは違った(霊的)原理に従っていたと言わざるを得ない。その場合には、言行不一致ということになる。

純粹にエピクロスの唯物論の立場からすれば、快樂を節制する倫理的自制はどこからも出てこないからである。そうした自制は、この世をすべてとする唯物論からではなく、霊的な世界観からしか生まれえない。

百歩譲って、エピクロスの真意は、諸欲の抑制は、決して霊的な価値観に基づくのではなく、練達のグルメのように快樂そのもの持続を狙ったものだとしても、そのような節制的快樂主義をもってしては仏教でいう「生老病死」の四苦は免れない。結局、節制によって快樂を持続したとしても、老衰には懊悩し、死の恐怖は免れない。

それにここで問題にしているのは、エピクロスの人となりではなく、その思想である。筆者には、とてもそうは思えないが、祖師が達観して、安心立命を得たとしても、このような思想を受けた弟子たちの魂の狂乱と懊悩には想像してあまりあるものがある。

真正で正統なる宗教哲学的見地からすると、エピクロスの現代版である現代思想は、コロナ禍よりも怖い猛毒性の病原菌である。こうした病原菌が今日本中に蔓延しているのである。その悪質な唯物論ウィルスを撲滅するワクチンを創るのが本稿の目標である。

以上、古代唯物論の淵源をたどってきたが、次に近代的な唯物論の発生原因とその帰趨を見ていこう。上述のとおりそこには古代唯物論の再燃といった面もあるだろうが、近代独自の唯物論発祥の条件も見て取ることができるだろう。

## 2 近代的な原因、近代科学の発生による唯物論・無神論の帰趨

近代科学は、それ自体は、人類に圧倒的な恩恵をもたらしたので、無論否定することは出来ないが、同時にその行き過ぎの科学万能主義によって唯物論・無神論の発生原因になってしまったと思われる。

実際には、コペルニクス、ガリレオ、ケプラー、ニュートン、ボイルなど近代科学のパイオニアたちは、決して唯物論者・無神論者ではなく、篤実のキリスト教信仰者であった。彼らが、反対したのは、決してキリスト教信仰そのものではなく、キリスト教会(特にカトリック)による、聖書に書かれていない独断的教義である。

宗教VS科学ではなく、旧来の科学観VS新しい科学観という対立図式である。むしろ近代科学の創始者たちは、聖書に書かれていない神の言葉を大自然に求めた。まさに自然は、「書かれざる神の法」であったのである<sup>20</sup>。

---

<sup>20</sup> 例えば、近代科学の創始者の一人ガリレオは、科学と宗教の相乗的關係を次のように説

## 2.1 デカルト的な科学観

近代哲学の祖とされるデカルトは、その主著『方法序説』、『省察』などで、人間の精神と物質（肉体）を明確に区別し、一方で魂の不死を証明しつつ、同時に解剖学などの近代医学や機械文明の元になる機械学などの道を開いたことで人類の福利に大いに貢献したが、他方、神から独立した近代的自我の肥大を助長し、また物質文明の過信を生んだ。

とりわけ、後にライプニッツに批判されるように、精神と物質を峻別し、物質界を延長としてのみ見ることで、自然の内なる質的なものを一切捨象し、単なる量的で無機的な素材として位置付けたところにデカルトの行きすぎを見てとることができるだろう。

また、近代的自我の確立に多大な貢献をしたと同時に、そこに「考える主体（コギト）」としての自己のみを見出した結果、伝統的な共同体や倫理的エートスから孤絶した自我肥大の弊害を生むことになった。

## 2.2 ニュートン的な科学観

ニュートンは、近代科学を大成し、天動説を打ち崩し、ニュートン力学に基づく近代的な宇宙観世界観の地平を樹立するという偉業を成し遂げたが、まことに皮肉なことに、近代科学とそれに基づく産業革命の大成功によって、精神的な価値の軽視を呼びこんでしまった。

とりわけ、ニュートンの万有引力の法則によって、天使たちの住まう天上界と世俗の地上世界（月下世界）の質的な区別が一扫され、天上界は、単なる物質的な天体に過ぎなくなり、ローマ教会による壮大な宗教的宇宙が崩壊した。

現代でもハーバード大学の理論物理学の教授リサ・ランドール<sup>21</sup>などが提示する四次元以上の高次元宇宙を想定すれば、宗教的霊的な世界像を保持することができようが、そうした高度な霊的な次元構造を解さぬ一般民衆であれば、「空の彼方に神や天使たちの住まう天国がある」といった信仰の拠り所がなければ、先祖伝来の宗教観を維持することが困難になるのは道理であろう。

また、ガリレオ以前は、すべての物質現象には、目的（本質）があるとされていた。例えば、物質は、地面を求めて落下する本質（大地を恋する傾向性）

---

明している。「聖書と自然はともに神の言葉から生じたもので、前者は聖霊が述べてものであり、後者は神の命令の忠実な執行官である。二つの真理が対立しあうことはありえない。したがって、必然的な証明によってわれわれが確信した自然科学的結論と一致するように、聖書の章句の真の意味を見出すことは注釈者の任務である。」（三田一郎『科学者はなぜ神を信じなのか コペルニクスからホーキングまで』、講談社、2018年、p.94）

<sup>21</sup> 次の文献を参照。リサ・ランドール『異次元は存在する』（若田光一訳、NHK出版、2007年）

を持つとする。これは現代的には、ロマンチックだが、少し幼稚な自然観に映るだろう。

ガリレオは、こうした考え方を否定して、物が落下する際の法則性を探求して近代的な力学を創り上げた。ニュートンは、その主著『プリンキピア・マテマテカ』において、ガリレイの力学をさらに発展・体系化して現象と本質を分け、科学の研究領域を現象界に限定し、本質に関しては、「隠れた性質 (occult qualities)」と呼び、神学や宗教の研究課題としたのである。

例えば、万有引力の法則は、「なぜ、物が落ちるのか」、「なぜ、重力があるのか」といった哲学的な探究<sup>22</sup>は切り捨てて、物質に引力（重力）が働いている場合、一定の時間にどのような運動変化をするのかのみを観察し、計算する。

本質 (オカルト)	現象
神学的な研究対象＝創造主の御心を探求して、霊的な世界観を樹立する重要な課題である、	近代科学の研究領域 3次元の自然法則を発見して、人類の地上的な福利に多大な貢献をなす
例 万有引力の原因など	例 落下の法則 放物線
Why does the object fall?	How does it fall?

この図表を見ても理解できるように、物体が一定の時間の範囲内でどのように落下していくかは、誰の眼にも明らかなので、そこに自然法則を見てとることができる。しかし、なぜ、地球に重力があって、なぜ、星と星が引き合ったり、物質が落下するのかという理由は、目に見えない神の創造意図を研究しなければわからないことなので、これは、神学の研究課題である。

ニュートンは、前者の近代科学の探究を熱心にしたが、後者の神の意図の探究（神学）にも生涯全力を注いだのである。生涯に書いた論文の数は、物理学のものよりも神学関係のものの方がはるかに多いと言われている<sup>23</sup>。

しかし、非常に皮肉なことにニュートンの神学・オカルト研究の方は、万人の理解の及ぶところでなかったが、後者の現象に対する科学研究は、その後目に見える成果を上げ、異常な発展をすることになって、やがて産業革命が起き、自動車が走り、飛行機が空に飛び、果ては人類は、宇宙船まで開発することになった。また、コンピューターサイエンスの発展で、人間の生活水準は、飛躍的に向上し、普通の庶民が、昔の王様よりも豊かで便利な生活をするこ

<sup>22</sup> 例えば、「ニュートンは、重力に関して、そう考えなければ説明がつかないので、それは空間全体を満たしているある生きた存在の不断な活動の現れではないかと考えようとさせた。(H・バターフィールド、『近代科学の誕生 (下)』、渡辺正雄訳、講談社、1978年、p.21)

<sup>23</sup> 三田一郎『科学者はなぜ神を信じるのか コペルニクスからホーキングまで』、講談社、2018年、p.124

った。

その結果、科学が従来であれば「神の力」、「魔法・魔術」と言われた領域を覆うほどの威力を放つことになって、その魔術的な成果に幻惑された人類は、本来の神の領域を次第に軽視し、忘れ去ることになった。現代、「オカルト」と言えば、「怪しげで非科学的な領域」を連想するようになって、次第に公的な世界から追放されることになったのである<sup>24</sup>。

### 2.3 唯脳論・遺伝子論による現代の唯物論・無神論

上述した通り、現代の唯物論は、唯脳論という人間機械論の立場を取り、さらには、人間の魂の起源を「遺伝子」の仕組みから説明しようとする。つまり、現代人の多くは、神を捨てて、脳や遺伝子を信仰する「大脳・遺伝子ご本尊教」という“疑似宗教”に陥っていると言える。

そのもっとも先鋭化した思考形態が、唯脳論である。我が国における唯脳論という用語と概念の提唱者である養老孟子は、卓抜なレトリックを駆使する文化人でもあるが、以下のように軽妙に「脳から心が発生するか」を説明する。

脳と心の関係の問題、すなわち心身論とは、実は構造と機能の関係に帰着する、ということである。この点を具体的に考えてみよう。脳と心の関係に対する疑問は、たとえば次のように表明されることが多い。「脳という物質から、なぜ心が発生するのか。脳をバラバラにしていったとする。そのどこに、『心』が含まれていると言うのか。徹頭徹尾物質である脳を分解したところで、そこに心が含まれているわけがない。」これはよくある型の質問だが、じつは問題の立て方が誤っていると思う。一略一次のように考えてみるとよい。循環系の基本をなすのは、心臓である。心臓が動きを止まれば、循環は止まる。では、訊くが、心臓血管系を分解してくとするとする。いったい、そのどこから「循環」が出てくるというのか。心臓や血管のどこにも循環は入っていない。心臓は解剖できる。循環は解剖できない。一略一なぜならば、心臓は「物」だが、循環は「機能」だからである。たとえばこの例が、心と脳の、一見矛盾する状態を説明する。脳はたしかに「物質的存在」である。一略一ところが心はじつは脳の作用であり、つまり脳の機能を指している<sup>25</sup>。

---

<sup>24</sup> ちなみに、こうしたニュートン的な世界観を哲学的に裏打ちしたのが、カントの哲学である。カントは、その主著『純粋理性批判』において、理性の探究は、目に見える自然（現象）に関しては、普遍的な法則を発見することができるが、神や魂、宇宙の果てなどの霊的な領域は、人間理性の能力を超えているとして、学問科学の研究領域から外した。現代の不可知論の立場は、ここから来ている。

<sup>25</sup> 養老孟子『唯脳論』、筑摩書房、1998年、p.28

実に巧妙なレトリックである。その論旨を要約すると、脳は、構造であり、心は機能である。したがって、その脳という構造が破壊されれば、心も機能を停止する。すなわち、肉体（脳）の死とともに心も消滅するということである。これは、現代版のエピクロス唯物論である。

その思考の枠組みは、以下のように定式化することができるであろう。

- ① 人間の脳は、優れたコンピューター（人工知能）の構造、すなわちハードに当たる。
- ② 精神は、その作用、つまりソフト当る。
- ③ コンピューターにおいては、ハードが壊れれば、ソフトも停止する。
- ④ 同様に、脳（ハード）が壊れた時点で、心（ソフト）も停止（死亡）する。
- ⑤ 故に、人間は、死ねばそれっきりで、死後の世界（霊界）は存在しない。

また、“遺伝子ご本尊教”の論理も、明瞭だろう。人間の心も体もまた運命もあらかじめ遺伝子（DNA）に組み込まれている。つまり、従来は、神が人間を創造し、その運命も司っていると考えられていたが、科学が発展した現代においては、神に代わって、遺伝子がそうした“創造主”の役割を担っているのである。したがって、遺伝子は、物質でできているので、人間の本質は、神を持ち出さなくても、すべて遺伝子という物質によって説明することができる。

これが、現代的な遺伝子論的な唯物論である（リチャード・ドーキンス説）。

### 3 宗教的理性による唯物論・無神論の打破

#### 3.1 原因結果の法則による唯脳論の論破

2.3の論法は、どこがおかしいのであろうか。こうした唯脳論が成り立つためには、人間とコンピューターと間に対応（平行）関係が成り立つこと、すなわち、精神と大脳との関係とコンピューターにおけるハードとソフトの関係に対応性があることを前提にしているが、果たしてそうであらうか。

以下、原因と結果の法則に基づいて両者の連関を検証してみよう。まず、一般に、原因と結果の関係において、「原因が変われば、結果も変わるが、結果が変わっても原因は変わらない」という法則を見て取れよう。

例えば、川の上流と下流では、逆流現象を除いて、上流が原因で、下流が結果であることは容易に見て取れるだろう。したがって、上流に毒水を流したら、下流の近くに住んでいる人は、その被害を受けることはあるだろうが、逆に、下流において毒水を流しても、上流の人は、影響は受けない。

同様に、上流の水をせき止めたならば、やがて下流においても水は止まるだ

ろうが、逆に、下流において水を止めても、上流の水は止まらない。

このような因果関係に照らして考えてみると、コンピューターにおいては、ハードが原因で、ソフトが結果であることは自明である。ハードを操作する（インプットする）ことで、液晶画面に現れたソフトも変化するからである。逆に、PCにおいて、外部から一切の入力なしに、ソフト画面が勝手に動き出し、それに基づいてキーボードがカタカタ動きだしたならば、これは、怪奇オカルト現象であろう。（映画『ゴースト』では、そのようなシーンがあった）

ところが、人間における脳と心の関係は、いかがであろうか。例えば、私たちが何かを考えるときには、外部からの入力は一切なく、心が好きなことを考えることができる。その結果、例えば、私が、「愛」という文字をキーボードに打ち込もうとすることで、手がそれに合わせて動くことができる。「右手を上げよう」という思いが原因になって、「右手が上がる」という結果が生じる。

つまり、人間の脳と心は、コンピューターのハードとソフトとは、因果関係が全く逆なのである。コンピューターの場合には、ハードが原因で、ソフトがその結果であるから、先ほど考察したように、ハードが壊れれば、当然にソフトも作業を停止するが、人間の場合には、心が原因で、脳や体の動きがその結果であるので、結果である身体や脳が活動停止をしても、原因である心には影響はない、ということになる。要するに、脳が停止しても、体が破損しても魂は滅ばないということだ。

少なくとも、唯脳論のいう靈魂死滅説は、完全に破綻していると言えるだろう。もしも、人間の脳をコンピューターに譬えるならば、それは、「外部操作を一切せずに、勝手に考える“お化けコンピューター”になってしまうのだ。現代の唯脳論が説明する「人間の心=脳的作用」という等式も、上記の因果関係を混同することで生じた明らかな誤謬にすぎない。

脳をいくら解剖学的に研究しても、心の本質はつかめないのだ。人間の心は、三次元の物質現象とは全く独立した霊的な働きであるからだ。その本質を語るることができるのは、心霊の秘密を知る真実の宗教家や預言者だけだろう。

人間	コンピューター
心が原因となって、脳（肉体）が動く	ハードが原因となって、ソフトが動く。
外からの操作なく自律的に考えられる。	外側から操作（インプット）がなければ、ソフトは作動しない。
原因である心は、脳や肉体が滅んでも影響は受けない。魂の不滅	原因であるハードが壊れれば、ソフトも停止する。

### 3.2 遺伝子決定論による唯物論・無神論の誤り

次に、リチャード・ドーキンスらが提唱する遺伝子決定論、遺伝子が、心と体、そして人間の運命を決めるという考え方の誤りを見てみよう。これも原因と結果の法則（因果律）で考えてみるとよくわかる。

遺伝子決定論は、遺伝子が原因となって、身心や運命という結果が生じるという考え方だが、さらに言えば、遺伝子そのものがどうして生じてきたのか、という問いを立ててみるとよい。つまり、遺伝子の発生原因の探究である。

これは、以下の三通りの可能性しかない。

- ① 遺伝子が何の原因（意図）もなく偶然に生じた。
- ② 遺伝子が、人間によって創られた
- ③ 遺伝子が、人間を超える叡智によって創られた。

一個の遺伝子情報とは、市立図書館の全書籍の情報量よりも多い。それが偶然に間違いなく出来上がる確率は、限りなくありえない数になるだろう。それは、譬えてみれば、猿が適当にパソコンのキーボードを打ったとして、一字一句正確にシェイクスピアの戯曲の全文字を打ち出す確率にも相当するだろう。（そのようなことが起こったら、まともな理性のある人間であれば、裏で人間が操作していると想像するに違いない。）

つまり、上の②が起こるケースは、①のケースよりもはるかに難しく、不可能に近いのだが、遺伝子に関しては、②の可能性すらも認める人がいないだろう。人類の中でいまだかつて遺伝子そのものを設計した人はいないからである。②ですらありえないとしたら、まして、それよりはるかに難しい①のケース：遺伝子が設計者もなく偶然に生じる可能性は、皆無と言い切ってもいいだろう。

つまり、遺伝子の原因は、③の「人間を超えた叡智」、すなわち神（仏）しかありえないということになる。

これは、無論、古典的には、「自然神学的な神の存在証明」と呼ばれているものの焼き押しであり、進化論者が忌み嫌う「インテリジェント・デザイナー」の立場である。

例えば、眼のような複雑な構造が、なんの設計意図もなく偶然に自然に生じるわけがないということである。これは、私たちの実感に即しても非常に納得しやすい論法であろう。

しかし、これに対して、リチャード・ドーキンスは、次のように反論する。

進化的変化が起こるのに使える時間が途方もなく長いので、われわれはそれを直観的に把握できないことである。一略一 眼は化石にならないので、何もない状態から現在のわれわれのもっているような複雑さと完全さをそなえた眼が進化するのにどれくらいの時間がかかったか、わからない。しかし、それに利用できた時間は数億年である。比較のために、人間がイヌを遺伝的

に淘汰することによってはるかに短い期間で生み出してきた変化を考えてみよう。数百年ないし数千年のうちに、われわれはオオカミからペキニーズ、ブルドック、チワワ、そしてセントバーナードまでつくってきた<sup>26</sup>。

確かに一見すると非常にもっともらしい説得法のようにも思える。しかし、狼から犬への変化とまったく一から眼が出来上がるのを程度の違いとするところに狡猾な詐術がある。例えば、象で考えてみれば、マンモス→ナウマンゾウ→現代のインド象といった進化であれば、その差は、程度問題とみる見方もできるであろう<sup>27</sup>。

では、最初の象型の種が進化の途中に登場してきた時の場合を想像してみよう。まず、あの巨大な四本足が突然変異で生じるというのも無理があると思うが、それだけではない。あれだけ太く重い足であれば、前足は、捕食のための手にあたる道具としては役に立たない。前のめりになって捕食するのも非常に不都合であろう。象の場合には、異常に長い鼻が同時に「手」の役割を果たす。それも突然変異で長い鼻が生じたというところの騒ぎではない。同時に微細な神経と筋肉組織も備わっていなければ捕食活動はままならない。私は、動物園で、象が巧みに鼻先をつかってミカンの皮をむくのを観察したのを見たことがある。

すなわち、象の肉体構造一つとっても、同時に太い四本の脚、長い鼻、そして不思議なことに精妙な神経&筋肉組織もそなえている異様に長い鼻が備わっていなければ、個体として生存すらかなわないのである。

ドーキンスは、とてつもない長い時間がたてば、そのような「天文学的奇跡的符号」が偶然生じると主張する気なのであろうか。まして、眼の構造などは、どんな精巧なカメラも及ばぬほど精緻複雑にできている。カメラの各パーツを箱に入れて、シャッフルすると、短い時間ではできないけれども、億年の歳月がたてばカメラが自然と出来上がることもあると彼は本気で信じているのであろうか。

さらにドーキンスには、科学者が決してしてはならない致命的なミスを犯していることを指摘しておこう。それがいやしくも科学の名でなされることならば、「不可思議」とか「理解不能の〇〇によって」といったオカルト的宗教的言辭を弄してはならないはずである。

しかるに、彼は、「進化的変化が起こるのに使える時間が途方もなく長いので、われわれはそれを直観的に把握できないことである。」と臆面のなく言い放つ。

---

<sup>26</sup> リチャード・ドーキンス『盲目の時計職人』、日高敏隆監訳、早川書房、2013年、p.79

<sup>27</sup> だからといって、その「進化」の過程になんの設計意図があると考えerるには、無理がある。ドーキンスの挙げている犬の品種改良にも人の手がかかっているのは、上述の引用箇所において「われわれは、~つくってきた」という形容を見ても明らかである。

要するに、「人知では計り知れない時間の中では、人知で計り知れない奇跡が起こりうる」と主張しているのである。

人間には、「直観的に把握できぬこと」をドーキンスだけは洞察できるのだろうか。その論法において無自覚にせよ、自らを神の立場に置いていることに気づいていただきたいのである。このような言辞が許されるのは、仏陀やイエスのような人間を超えた存在しかいないだろう<sup>28</sup>。

結局、ドーキンスは、科学とは全く無縁な似非宗教的な詭弁を弄しているだけであることがわかりだろうか。全米でドーキンスの似非科学本は、ベストセラーになっていると聞く。真に驚くべきは、この程度の珍妙なでたらめ論法に惑わせられる知識人、現代人があまりにも多すぎるということである。

## 結び

科学の進歩は、人類にとって非常に望ましいことである。しかし、それにともなって人間としての当たり前の情操や霊性が進化していかなければ、知性をもった野獣に等しいだろう。「人間というやつ、それを理性だのと称して、実のところは獣も顔をそむけるようなことに精出している<sup>29</sup>。」(『ファウスト』)

本稿で論じたように、進化論、唯脳論、遺伝子還元論など現代思想における唯物論は、古代原子論デモクリトス、特にエピクロスに淵源を持つ。結局エピクロスは、人知を超えた不可思議を不可思議としておけずに、大胆不敵にも人間界の言葉で説明をせんとした。それを人間が神にならんとしたプロメテウスの勇気と称賛する向きもあろう。

しかし、この宇宙の神羅万象は、私たちの賢しらかな知性や理性をはるかに超えたる神秘に満ち満ちている。私たちは、ともすれば蟻塚の蟻が、自分たちの住処の大きさを図ることで、したり顔で全宇宙の神秘を知ったかのようにうぬぼれているに過ぎないのではないか。

---

<sup>28</sup> 例えば、『法華経』の伝えるところによると、仏陀は、人間には計り知れない無窮の時間について語っている。それは、人間心ではとうていつかみ得ぬ宇宙の神秘に対して、われわれ人間の傲慢さを諷める意図もあつたのではないかと思う。「わたしははっきりと思い出すのだが、良家の息子たちよ、数えることも計算することもできないほど遠い劫の昔に、実に測り知ること、考えることも、推測することもできないほど以前のことが、いやそれよりも遙か以前に、折しもチャンドラ＝スールヤ＝プラディーパ（日月灯明）という完全に「さとりに」到達した阿羅漢の如来が、この世に現れた。」(『法華経 上』、坂本幸雄、岩本裕訳注、岩波書店、1962年、p.41)、「劫」(カルパ)は、ヒンドゥ教の世界観では、人間の四十三億二千万年を一カルパとするが、仏教徒の愛では単に「想像も計算も超越したきわめて長い期間」という漠然とした概念を示す。同書 p.382)

<sup>29</sup> ゲーテ『ファウスト 第一部』、池内紀訳、集英社、2004年、p.23

今一度、哲学の原点、ソクラテスの「無知の知」の自覚に回帰するべきではないだろうか。私たちは、まだ何も知らないに等しい。だからこそ、永遠なる叡智を求めて、心虚しく厳かなる憧憬を胸に秘めてこの無窮なる宇宙の探究にむかって旅立とうではないか。

考える人間の最も美しい幸福は、究めえるものを究めてしまい、究めえないものを静かに崇めることである。(ゲーテ『格言と反省』から)

了

### 参考文献

- 川崎信定『インドの思想』、筑摩書房、2019年  
『聖書 新共同訳』（「創世記」）、日本聖書協会、1991  
プラトン『パイドン—魂の不死について』、岩田靖夫訳、岩波書店、1998年  
アリストテレス『形而上学（上）』、出隆訳、岩波書店、1959年  
セクストス・エンペイコリス『学者たちへの論駁（1－3）』、金山与平、金山万里子訳、  
京都大学学術出版会、2005-2006年  
カルロ・ロヴヴェッリ『すごい物理学』、第1章、竹内薫監訳、栗原俊秀訳、河津書房出版、  
2017年  
H・バターフィールド、『近代科学の誕生（上）、（下）』、渡辺正雄訳、講談社、1978年  
『エピクロス 教説と手紙』、井隆、岩崎允胤訳、岩波書店、1959年  
『マルクス・コレクション I デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異、  
ヘーゲル法哲学批判 序説、ユダヤ人問題によせて、経済学・哲学草稿』中山元、三  
島憲一、徳永恂、村岡普一訳、筑摩書房、2005  
三田一郎『科学者はなぜ神を信じるのか コペルニクスからホーキングまで』、講談社、  
2018年  
リサ・ランドール『異次元は存在する』若田光一訳、NHK出版、2007年  
養老孟司『唯脳論』、筑摩書房、1998年  
リチャード・ドーキンス『盲目の時計職人』、日高敏隆監訳、早川書房、2013年  
『法華経 上』、坂本幸雄、岩本裕訳注、岩波書店、1962年  
ゲーテ『ファウスト 第一部』、池内紀訳、集英社、2004年